

Disabled Persons And Physically Unimpaired Persons Live Together ~Open Shared-House~

Infrastructure Systems Engineering Course

1155074 Shngo Odani

Abstract

• Housing Problem Of Disabled Persons

After injury, cannot be admitted to the hospital forever disabled persons. When you leave the hospital one day will come.

However, in the "public housing", occupancy number of units for disabled persons is not enough current state of housing in Japan. Then, it refused to live in the "apartment house." And, there are situations that cannot be repaired. As a result, the leave hospital is delayed house to live in be not found. It is to be admitted to different hospitals. It led to the "independence" is delayed.

It is the purpose of that by taking advantage of the characteristics of the share house in order to solve the housing problems of disabled persons, and disabled persons live with "independence".

• Community

There was a community in Japan in the past. However, the community is now no longer in urban areas in particular by modernization. Decline of the community, is also involved in social participation of disabled persons.

There is prejudice and discrimination against disabled persons in Japan. So, I want to eliminate prejudice and discrimination against disabled persons. To do so, I will increase the chance of contact with disabled persons.

In the vicinity of the "National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities", there is a community. "National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities" is a hospital where I was admitted last year. I develop it more. I design a share house as the method.

障害者と健常者が共に暮らす ～まちに開かれたシェアハウス～

社会システム工学コース

1155074 小谷 慎吾

1-1 研究の背景

1-1-1 障害者の住宅問題

障害者は受傷後、いつまでも病院に居られるわけではなく、いつか退院する時が来る。しかし、日本の住宅の現状は『公営住宅』では、障害者の入居戸数が足りない。『マンション・アパート』では入居を断られる・改修ができないという状況がある。そして、住む家が見つからず、退院が遅れたり、違う病院や施設に入所することになり『自立』が遅れることに繋がっている。持ち家を改修出来る人は良いがそうでない人は沢山いる。

1-1-2 コミュニティの必要性

日本のコミュニティの移り変わりとして、日本は農耕民族で先祖代々受け継がれた土地で農業を行い暮らしてきた歴史があり、そこでは密な近所付き合いや地域の集まりがあったが、社会の都市化・産業化が進むにつれ近所付き合いが少なくなり都市部ではそれが無くなりつつある。この問題は、超高齢社会を迎えた日本において、高齢者が孤独死する事にも繋がる話である。一方、地域との関わり合いが密な地域では、災害時に多くの命が助かっている事も事実である。

また、このコミュニティの衰退は、障害者が社会参加出来るかという事にも繋がっている。日本では障害者に対する差別や偏見が今なお存在する。これは、日本の義務教育制度のあり方に問題がある。小学生になると特別支援学級という形で障害をかかえる児童は別のクラスにさせられる。福祉が進む国では、障害をかかえる児童も一般のクラスでみんなと一緒に学んでいる。この違いが差別や偏見を生む始まりだと思う。障害者と接する機会が諸外国に比べ著しく少ない日本において、障害者は閉鎖的なイメージを持たれがちだ。そのマイナスイメージで周囲になかなか障害を理解してもらえず、閉じこもり気味になる者も少なくない。そこで、私は障害者に対する差別や偏見を無くすために、障害者と接する機会を増やすしてやれば、障害者が社会参加をし易い環境が生まれると考えている。

1-2 研究の目的

1-2-1 シェアハウスでの「自立」

障害者の住宅問題を解決するためにシェアハウスの特徴である共有部が充実している事や安全である事(他人と共に暮らす事で車椅子からの落車した時も助けを呼べる)など、障害者が暮らすためのメリットが多くあるシェアハウスを設計し、障害者が「自立」して暮らす事を目的としている。

1-1-2 コミュニティの形成

私が昨年入所していた「国立障害者リハビリテーションセンター」の周辺では、障害者と地域住民が気軽に声を掛け合える環境があった。それをもっと発展させたいと思い障害者の住まいに地域住民が訪れやすい環境をつくることで、今ある障害者に対する偏見が無くなりみんなが助け合って暮らしていくコミュニティを生む事を目的にしている。そして、障害者も地域住民と交流していく中で外に出る機会も増えていくと考えている。